

# 武道における礼の教育的価値 —礼の本質論についての研究—

末 次 美 樹

## 1、はじめに

武道には古くから礼という言葉が存在する。武道と礼の関係を教育的観点から見ると、武道は礼を媒介に人間形成を行っているといえよう。しかし、現代の武道における礼は、その本質や意義が混沌としており、その形式のみを重視する虚礼化、もしくは形骸化の傾向にある。武道の礼には、形式のみではない大切な意義が存在している。現代武道の礼における不足箇所を補うために、礼の本質論を展開させる必要がある。

本研究は以上のような視点から、武道の礼について研究するものである。礼においては、歴史的起源の考察ではなく、礼そのものの本質、つまりその内容上の原点をさぐるべく、古代中国において成立した礼に焦点を当て考察する。そして、本研究における武道の位置づけをし、その内容と特性を把握した上で、武道における礼の概念を明らかにするものである。礼と武道を融合させ、より高次の段階での武道における礼の教育を総合し、礼を広く社会に貢献させる事を目的とする。

## 2、武道における礼の問題点

武道は、「礼に始まり礼に終わる」<sup>1)</sup>といわれるように、古くから礼を尊重し、礼を媒介にして精神の重要性を説いてきた。礼という言葉には、作法・制度など社会の秩序を保つための生活の規範、敬意をもった振る舞い、またお辞儀などが含まれている<sup>2)</sup>。武道ではその特質から、自己の感情を抑制できない場面であっても礼を行うことが求められている。武道における礼には、精神性や道徳性を身につけ、

人間形成を実現する上での大事な要素が包含されおり、時代を越えても我々が教えられ、そして実践しなければならない普遍的な概念が多くあるといえよう。しかし、最近では、礼の形骸化が見られ、その原因について考えてみると幾つか原因が導かれる。

一つは、武道における勝利至上主義、結果主義の傾向<sup>3)</sup>によるものだと考えられる。つまり、勝利至上主義の影響による礼の空疎化によるものではないだろうか。試合前後に、形式として礼<お辞儀>をした選手が、勝てばガッツポーズ等で喜びを表し、負けた選手は肩を落としその場で呆然としている場面をよく目にする。勝負の結果で感情が乱れているのである。勝負に捉われ過ぎた結果、武道における礼は動作形式に過ぎず、中身が伴っていない状態なのである。つまり、武道の中で礼が尊重されながら、実は礼が無視されているのである。

二つ目は、礼の意義についての伝統の忘却にある。礼儀作法やその方法は精神修養であり、礼とはその厳しい遵守に伴う道徳的な訓練<sup>4)</sup>といわれている。礼において大切なのは、その精神状態と身体の融合であるが、武道全体における礼の役割や内容やその方法は、礼<お辞儀>をするという動作のみが重視され、その形式的な部分にこだわるところに教育的価値があると捉えられているのである。現在では、その形式的な振る舞いも曖昧になりつつある。

新渡戸は、「他者の感情を尊重することから生まれる謙虚さ、慇懃さが礼の根源である」<sup>5)</sup>と述べている。つまり、礼とは人間の精神的な部分が体現化したものである。動作や態度といった身体的な表の部分と精神的な裏の部分という二つの側面が存在し一つの礼を作り上げている。武道は、長い間、その礼を媒介に教育的概念を通してきたといえるが、そもそも媒介という考え方そのものが、形式という次元のものではなく、あくまでも内容に関わったものでなければならない。

武道の<礼>が伝統として、また文化として受け継がれ、その役割や存在は大きいといえるが、礼の虚礼化という点において、我々は、疑問を投げかけなければならない。「人間形成」がなされるどころの「武道の礼」の概念が曖昧なままに、そこにおける「人間形成」が論じられている結果である。これまでの武道における礼の教育的価値やその意味は明確のようで、実は不明確だったのである。

### 3、古代中国における礼の起源とその概念

礼という字は、旧字体で「禮」と書かれ、神を表す「示」と祭器を表す「豊」が合わさっている<sup>1)</sup>。つまり、礼という字は、神に仕えてこれを祭ることを表す字であることが理解できる。古代中国人は、「天を万物の支配者と尊信」<sup>2)</sup>し、その法則に従うことので、農耕生産のリズムや生活上の規則、さらには道徳的実践を決定した<sup>3)</sup>。これを礼と呼んだのである。万物は天より生じたため、人々は天の命令(天命)に服従しなければならず、天命にかなうか否かは、人の道徳的実践によって決定されたのである。古代中国の思想は、天を主体とした倫理的性格が強く現れているのである。天を敬い、またそれに従うというような天地一体の認識に基づいたことから、古代中国における礼の対象は、天地の規則性・法則性・循環性といった超越的なものであり、その支配下にあるところの個人を超越する社会全体の秩序への礼拝をも指示していた。古代中国人は、複雑な宇宙自然の内容や動きを形式的に分類し、人間の生活リズムを形成しようとしていた。自然の動きと人間の営みを調和させ、きわめて単純な形で、その一致点を見出そうとしたのである。

このように、礼の起源はいろいろな説があるが、いずれにしても、礼は本来、宗教的な観念を表すものであり、現在のわれわれの考える礼の観念については、宗教的な色彩を取り除いた意味での、社会生活上の一定のルール及び規範という表現が適切であると思われる。礼は、社会という空間の中に存在している人間が、円滑に生活していく上で生まれた知恵であり、文化なのである。

### 4、『礼記』における礼

『礼記』は、孔子の思想を中心にまとめた「礼に関する記録」<sup>1)</sup>であり、様々な儀式やその理論・人間観世界観・政治理論などが一定の基準なく極めて雑然と配列されている<sup>2)</sup>。『礼記』は、古代中国の社会を支えていた精神文化の総集のような存在であり、社会の規範を示しているものである。

### (1) 「曲礼篇」<sup>3)</sup> から見る礼の特色

下見は、社会生活における礼について次のように述べている。

①人と接する上での心構えとして、慎み深くするということは大変重要であり、礼の大事な条件であった<sup>4)</sup>。傲慢さや欲望などは心の生じるままにしてはならず、おごる気持ちは的確な判断を誤らせ、現実のものと自己とを見つめる調和的判断が崩れてしまうのである<sup>5)</sup>。人間の態度の上での表れ、言葉遣いでの表れで、その人の内面を見ることができる。何事にも敬するということが、礼に適った態度なのである。

②賢者は、人と交わって慣れ親しんでも、尊敬することを忘れず、おそれ憚るような人に対してもこれを愛する。また、愛してもその人の短所をよく知ってこれに感化されることはなく、また憎んでもその人の長所に対してはよく理解をしている。親しき仲にも礼儀ありといわれるように、親しみは相手を尊敬する気持ちを忘れないところに成立してこそはじめて意味がある<sup>6)</sup>。

③礼というものは親しいものとそうでない者との区別をつけ、類の同じものと異なるものを区別し、事のよしあしを明らかにするものであり、それらに対し、人がどのようにすべきかを教えるものである。礼というものはこびへつらって人をむやみに喜ばせるようなことはしない。つまり、礼というものは、程よいこと尊んで人をあなどることしない、むしろ自らを卑しく人を尊くという精神で対するのである<sup>7)</sup>。

④礼とは、社会の秩序を形作る物であり、このような社会に在る人間が言動を慎むことであり、ほどほどに自己を節することである<sup>8)</sup>。

⑤礼を行うということはみずからの分をわきまえた行為であり、礼には誠意が必要である<sup>9)</sup>。

以上、『礼記』における下見の見解を見てきたが、我々が、日常生活で陥りやすい生活上のあやまりを戒めるものが礼の本質であるといえよう。古代と現在では、生活形態が異なっているといえるが、人間が社会で生きるための規則は少しも変わっていないのである<sup>10)</sup>。

礼とは、社会の秩序を保つために、人間各々はどうのように生活していかなければならないのか、またどのように人と接していかなければならないのか、教えるものである。礼によって、社会生活における秩序が生まれ、また礼は、その手段でもあ

るといえよう。礼の基本には時代を超えた普遍性があるといつてよいだろう<sup>11)</sup>。

## (2) 区別原理・調和原理

礼は往来を貴ぶものであり、相互的なところで成立する<sup>12)</sup>ものである。相手に対して敬意を示せば、相手も自分に対して敬意を表す。ここに礼が成立するのであって、この相互作用に礼の特色がある。また、礼には、人間関係にけじめを与えるため、自己の立場と相手の立場の異なりをはっきりさせる役割もあった。人間の社会に必要なことは、人々の和合であるとともに、各々の立場や個人の尊厳をおかさぬことであり、礼にはその役割が包含されている。「個人の尊厳を保つ原理と他者と調和する原理」<sup>13)</sup>、すなわち、礼は、人間社会における調和原理、区別原理といった重要な役割も果たしているのである。

礼を大きく捉えた場合、それは、社会生活上の一定のルールないし規範という表現が適切であろう。礼は、社会の秩序の基本を形作るものために生まれたものであり、その社会にいる人間が言動を慎み、自己を節し、相手を敬する<sup>14)</sup>ことを意味する。社会における人間が、それぞれの立場をよく知り、人間関係を円滑にするために、人間をある固定的な立場に設定しようとするこの表現は、常にある立場にある現在の我々にも通じることである<sup>15)</sup>。そして、そこにおける態度や行動は、常に礼に適っている必要がある。

## (3) 孔子の説く礼について

孔子の説く礼は、仁<sup>16) 17)</sup>との関わりにおいて、把握しなければならない。仁を簡約すれば、個人的道徳を主とし、主観的傾向の強い、他者に対する思いやりとしての性格をもつ<sup>18)</sup>ものである。仁は、自己の欲望をおさえて礼に従うことであり、人を愛することであり、自己の欲しないものを他人にしないという心を常に持つことである。すなわち他人の身になって考えることである。礼は、この仁を基本にした「道徳基準」<sup>19)</sup>であると考えられ、孔子の説く礼が、社会に秩序をあらわすための規範でありながらも、あくまでも人間らしさを後立てているのは、礼が仁を前提としているからである<sup>20)</sup>。

また孔子は、国を一つの社会と捉え、その社会の上に立つ君子が人民に対して徳

義をもって教導し、礼儀をもって規制することが必要であると説いている<sup>21)</sup>。為政者が礼の実質である恭敬謙讓の心を以ていれば、国を治めることは容易であり、このような心がなければ、礼法の規定はあっても虚礼に終わり、何の役にも立たないのである<sup>22)</sup>。

古代中国では、社会は、礼によってはじめて平和に、また豊かになると考えられていた。君子は国を守るための手段として礼を用いたのである。礼は、人間がより円滑に生活していくための秩序であったが、広くは政治においても重要な役割をしていたということが理解できる。礼とはその社会の秩序であり、礼を学ぶことによって人々は善悪や立場の区別が付き、それに伴った行動をすることができる。礼は社会における道徳の一つの柱として考えることができる。

## 5、新渡戸稲造の『武士道』における武士の教育と礼の概念

武士道とは、長い間、武士社会の道徳観の中核をなすものであり、明治維新後武士社会が崩壊した後も、良識ある日本人の道徳観に多大の影響を及ぼしてきたものである<sup>1)</sup>。わが国には徳川幕府以来の儒教の伝統があり、国民道徳の形成に関係している<sup>2)</sup>。これは、道徳教育を支える精神的文化的な基盤が一応明確であったと理解できる<sup>3)</sup>。

この武士道理解の代表をなしているのは、新渡戸稲造<sup>4)</sup>の『武士道』<sup>5) 6) 7)</sup>であると言われており、同書はこの分野の古典であるにとどまらず、今日においても武士道研究をおこなうにあたっての標準としての位置にある<sup>8)</sup>。新渡戸が、武士が崩壊した明治時代に著していることから、現在においても通用する観念を多く含んでいるのである。新渡戸は、武士道を表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である<sup>9)</sup>と表現し、それ自体、形は持たないが、「道徳的雰囲気の薫を放ち今も私たちをひきつけてやまない存在である」<sup>10)</sup>と著している。

新渡戸は武士道を日本人の教育にとって最高のものと考え、日本的なものとは、つまり武士道的ということであるとまで言い切っている<sup>11)</sup>。新渡戸は、「武士道は日本人が人類のために、最もよく育て上げたところの普通の道であるから、それはそのまま人類普通の道と通用すべきものである」<sup>12)</sup>という考え方に立ち、英文で

『武士道』<sup>13)</sup>を著し、世界に紹介したのである。真の日本的とは、日本に閉じこもるということではなく、「世界的・人類的なものに個性的・民族的な形を与えて具体化すること」<sup>14)</sup>であると理解し、「武士道を世界的・人類的であるところの『日本的なるもの』の代表」<sup>15)</sup>と考えたのであった。

新渡戸は、武士道について、<明治時代となり封建社会が崩壊しても、道德徳目として生き残り、教育を受ける作法として、また日常生活の規則として、人の守るべき道を照らし続けている>ということを書いている。武士道を、成文法ではなく、口伝や行動により、人々の心に刻み込まれた「道徳的原理の掟」<sup>16)</sup>であるとし、それは封建制から生まれた道徳的体系であったとしている<sup>17)</sup>。そして、武士道を西洋の宗教教育に相当する精神教育として捉えた<sup>18)</sup>のである。

新渡戸が捉える武士道とは、日本人の教育にとって最高のものであり、日本的なもの、それはつまり武士道的ということである。武士道は日本人が人類のために、育て上げたところの普通の道なのである。

武士道には、武士の訓育として、主に精神的側面について著されているが、その訓育は多数存在し、多面的な構造であった。武士は、これらの訓育を適宜に使い分けた。技術面や精神面における諸々の訓育は、武士道にとって重要であり、また、場面による訓育の切り替えは、最高身分の武士にとって最も重要であったのではないかと推察される。武士道は、支配階級としての武士の精神のあり方と、戦闘要員としての武士のあり方の二つの側面を教育プログラムに組み込んでいったのである。

新渡戸は、『武士道』の中で、礼を以下のように述べている。礼とは、社会秩序を保つために人が守るべき生活規範の総称であり、儀式、作法、制度等を含むものである<sup>21)</sup>。また礼は、儒教において最も重要な道徳理念として説かれ、相手に対して敬虔な気持ちで接するという謙譲の要素がある。他人の安楽を気遣う考え深い感情の体現化であり、形だけの礼を虚礼とし、真の礼と区別しなければならない<sup>22) 23)</sup>。

新渡戸は礼について、人間関係という社会の秩序を基にした一個人としての精神のあり方、その精神に伴った行動や態度について説いている。相手に対する思いやりや敬讓・克己などの精神を礼として大きく捉えると、それは社会における人間に

において重要なものだったのである。武士道における礼とは、社会の秩序に従うというところに生まれる、敬讓や仁、徳、克己などの諸々の徳目が人間に身につくことであるという理解ができ、古代中国で成立した礼と共通の概念を見ることができ

## 6、礼の二面性

『礼記』に存在する礼や孔子、新渡戸が説いている礼の思想は、動作や態度の礼と精神の礼といった二つの側面が存在する。外に現れる動作や態度のみが礼ではなく、また精神的な部分のみが礼でないのである。人間が社会で円滑に生活していくためには、礼の二つの側面が同時に存在することが必要である。

例えば、礼の構造を有名なルビンの杯に当てはめて考えてみる。この絵は、要素的に見れば、白い紙の上に拡がったインクの染みにすぎないが、実は、見る者の態度によって杯にも見え、また向かい合った二人の人間の横顔にも見える<sup>1)</sup>。二つの側面が、入れ替わり立ち替わり、図として現れているのである。この絵に礼の概念をあてはめてみると以下のようなことがいえる。

白い杯に礼の精神的側面を当てはめ、黒い向かい合った横顔に態度や動作といった肉体的側面を当てはめる。表に現れたものは、どちらか一つであるが、この二つが同時に存在することにより、一つの側面が浮き出てくるのである。つまり、二つの側面が同時に拮抗することにより、一つのものが完成するのである。礼とは、このように、動作や態度と精神的部分の礼、すなわち二つの側面が同時に存在していなければならない。二つ同時に存在することが、礼の本質なのである。よって、形式のみの礼の教育は、その本質から外れているということになる。礼とは、人間の精神的な部分が体現化したものであり、動作の礼と精神の礼を一致させるところに、礼の教育の大切な役割がある。どちらかが欠ければ、それは礼とは呼べないのである。

この二つの側面は、人間教育についても同じことが言える。中林は、肉体のみが人間ではなく、また精神のみが人間でないと述べ、人間を観念的に、その働きを肉体として、あるいは精神として観察することは、この二つの部分を結合して人間が出来上がっていることではなく、このような観点は、あくまでも一つのものを見る、



角度でありそのものの部分ではないと言っている<sup>2)</sup>。つまり、『文武両道』という教育思想も、決して文・武両者が各々別個にその肉体的な向上と精神的な伸長をなした結果ではなく、文・武という教育契機が一人の人間を武人としての自覚に導いた結果、その身につけられた武芸や教養がその人の人間的教育として行為化されたものと見ることができる<sup>3)</sup>のである。したがって教育は、肉体的人間を対象とするものでもなく、精神的人間を対象とするものでもなく、肉体と精神を不離として持つ人間を対象とするものである。このように肉体的な訓練と精神的な自覚は別々のものではなく、同時で一体的なものでなければならないといえる<sup>4)</sup>。

本研究における礼の概念を以上のように捉え、以下は武道との関連を考察していく。



図1 ルビンの杯 (E=ルビン)  
村上隆夫著：『メルロ＝ポンティ 人と思想 112』

## 7、武士道から武道へ

武道における礼を理解するためには、まず本研究における武道の位置づけを把握しなければならない。

「武道とは、戦場で用いられた武術(武技)である闘技を競技化したもの<sup>1)</sup>である。武術は、本来、武士の忠義の精神から生まれた実用性の高いものであった<sup>2) 3)</sup>。つまり、武術は主君に対する仁義、道理のための奉仕的行為であったのである。徳川幕府の「擁護を絶対的的使命とする奉仕哲学が、儒教的武士道を形成した」<sup>4)</sup>といわれているが、その武士が行使する武術を武芸とし、礼節を知るところを武士道とした

のである。

慶応3(1867)年、大政奉還により、鎌倉時代以来700年に及ぶ封建時代は終わり、翌明治元(1868)年、日本は近代化の第一歩を踏み出した<sup>5)</sup>。明治新政府は従来 of 封建制を一掃し、諸改革を断行した。それらの諸改革の中で、武芸教育の衰退に直接影響を及ぼしたのは、廃藩置県、廃刀令などであり、藩校において行われていた武芸教育は公的場面から姿を消しつつあった<sup>6)</sup>。これにより、武士階級が消滅すると共に、武士は地位を喪失し、武術は衰退していったのである。このような時代背景の中で、戦闘における実用性を失った武術を新しく生き返らせたのは、「講道館柔道の創始者嘉納治五郎」<sup>7)</sup>であるといつてよいだろう。嘉納は、武術本来の特徴を生かし、精神主義化し、近代という時点において新しい方向を与えたのである。武術の一種目である柔術を研究し、世界的視野と教育的見地から、人間形成の道としてこれを生かし、武道の歴史の歩みに一大転換をもたらした<sup>8)</sup>。武術としての目的を持つ柔術の特徴を生かした上で、他の観点から改良を加えれば柔術が青少年の教育として大いに有効であると考えた嘉納は、柔術本来の目的である勝負の法に加えて、「体育法、修心法の観点から目的を定め、これを柱として技術の体系化を試みた」<sup>9)</sup>のである。柔術の技術面を整理改編たことで、競技として練習できるようになったのである。これにより武道は、健康の保持増進はもとより、知育、徳育、体育の総てを兼ね揃えた教材となったのである<sup>10)11)</sup>。

柔術は、元来、勝負の法を練習することが主であったが、嘉納は、柔術の目的を攻撃防御である技術の練習を通じて人間形成を図る「道」として性格づけ、これを「柔道」と称した<sup>12)</sup>。柔道を広く人類のために、実践道徳として提唱したのである<sup>14)</sup>。また、他の武術においても、名称に道を用いるようになり、それは、武道の目的が人を殺傷するのではなく、身体や精神を鍛えるところにあるため、その名称を本来の目的に相当するようにしたのである<sup>15)</sup>。このような過程を経て、「技術練習に精神価値がともなうことを強調して『武芸』『武術』を『武道』と呼ぶ」<sup>16)</sup>ようになったのである。武道のもつ技術的側面と道徳的側面は切り離して捉えるべきものではなく、武道は人間形成の道と謳われ、決して術のみの世界ではないことが強調されている<sup>17)</sup>。明治初期に輸入された近代スポーツの普及に伴って、武道は、ナショナリズム的な教科として、教育現場に広がっていった。武道は、競技的な優劣、勝

敗よりも、心技体といったような技芸に加え形や心構えまでも重んじ、日本的な伝統文化の一つとして位置づけられているようになったのである<sup>19)</sup>。武道は、明治以降、日本の文化的伝統の中に育った武術であり、思想である。そして、それは、武士道の遺産であり、現代にも通じる普遍道徳であるといえよう。

## 8、武道の特性

武道という言葉は、現在では、日本において発達を遂げた武術の総称として用いられている<sup>1)</sup>。武道といわれる種目において重要なことは、競技的な優劣、勝敗よりも、心技体といったような形や心構えまでも重んじる点であり、これを日本的な伝統の文化と位置付けているのである<sup>2)</sup>。

武道の特質をあげるならば、その起源が戦闘の技術であるということであろう。戦闘とは、命のやりとりであり、場合によっては自己の死に結びつくことになる。勝負が、命のやりとりを前提としなくなった場合、それは競技に転化する。したがって、非実戦しながら存続していく戦闘技術が競技に転化するの自然のことであろう。かくして武道は、優れた技能、体力と精神力によって勝負を争う競技といった内容をもった文化として現在まで存在してきたのである<sup>3)</sup>。

富木が「武道は技心一如である」<sup>4)</sup>と述べているように、武道は危機的生命的極限状態において工夫された「技」と心の「道」が一体となって存在する。技をはなれて道はないように、「技術面に即して精神を究め、ついに人生の道にまで到達」<sup>5)</sup>するのである。技には、危険な殺傷性が前提としてあるため、これに対応する心構えが必要であったのである<sup>6)</sup>。

武道は、殺傷性の存在を前提としているため、嘉納はこれに教育的特性を加え、勝負の場をもつことによって、武道の厳しい精神面を近代の方法で体験することを可能としている。つまり、『実戦の場』を『競技の場』にうつして、その実力を客観化して、自己を反省し、自己を向上させる。また勝負によって動揺する心の修行を現代の教育の場に生かしたのである<sup>7)</sup>。これは、武道の近代化に先駆をなしたものであるといえる。

## 9、武道教育の概念と礼の現状

中林は、武道の特性について、そこには常に教育的関心があったと述べ、人間が人間を作っていく教育として武道を捉え、以下のように述べている。

「教育の目指すところは、それぞれの時代の思想に左右され変えられるものであり、また民族や国家により異なるが、その目指す目標がどうであれ、人間が形成される過程には、基本的に普遍的な働きや観点があるはずである。われわれは、現代武道の教育的な意義をこのような意味で、その時代の思想や国家による形式的な目標を超えたところに価値を求めているかなければならない。」<sup>1)</sup>

中林が述べているように、武道においてはその全てを高い道德性の裏づけのもとに行わなければならない。これが、社会の調和発達につながるのである。武道をやることで、自己を成長させ、社会の調和発達に尽くすべきであるとした。

嘉納は、柔道の目的について、心身を最も有効に使用する道であると定め、柔道の修行とは、攻撃・防御の練習により、身体を鍛錬し、精神を修養して、その奥に存在している柔道の真の精神を体得することであると述べている<sup>5)</sup>。そして、心身を最も有効に使用する道を「精力善用」の四文字で示している。さらに、「精力善用」の道を社会生活に具体的に顕現する道標として「自他共栄」を示した<sup>6)</sup>。これは、「社会生活存続発展の原理である相助相譲、共存共栄、融和共調などの精神を総合」<sup>7)</sup>した語である。

「精力善用」と「自他共栄」の理念は、以下のように説明されている。個人としては、精力の善用活用という柔道原理に従って、身体を強健にし、知徳を練磨し、社会の一員としての職責を果たすべきであるとする。それは、「自分だけでできるものでなく、社会の人びと、社会においてなすべき事柄を助成することによってできるものである」<sup>8)</sup>。つまり、個人であると同時に、社会人として生き、その中で自己を成長させていくため、互いに譲り合い、助け合い、社会の調和発達、国家の隆昌、人類の共栄に尽くすべきということである。これが、「精力善用の原理を社会生活の上に顕現する場合の原理というべき、『精力善用』と表裏関係に立つ『自他共栄』

の原理である」<sup>9)</sup>。この「精力善用」「自他共栄」という概念は、現在実施されている各種の武道にも通ずる武士道精神とすることができる<sup>10)</sup>。武士の社会はなくなったが、武士道精神は歴史的な思想として残っており、武道は種目として残っているのである。ここに武道教育としての価値が見出され、その精神は、武道の礼にすべて包含されているのである。しかし、現代の武道教育は、以上のようなことが礼に包含されているという事を武道をやる本人達が知らないという状態である。武道教育は、勝利至上主義及び礼の形式的な教育ではなく、フェアな精神に伴った行動としての「礼」の本質的教育が必要なのである。

武力は、正しいルールをもつ力であり、暴力はルールのない力である<sup>12)</sup>。武道の場が競技の場として存在しているということは、当然そこには、ルールがある。我々が人間社会を形成し生活する上で守らなければならない法律や道徳、習俗に関する規範もルールである<sup>13)</sup>なのである。

武道をやっている者は、道場、試合会場等における礼儀はすばらしいが、日常生活では、個人的、社会的に見てもそれができないと指摘されることがある<sup>14)</sup>。指導者の指導方法が十分に確立されてない、もしくは、武道の教育的概念がうまく機能していないためではないだろうか。武道には、古くから礼というすばらしい素材が存在しているにも関わらず、それが機能していないのである。

礼とは、社会の秩序を保つために、人間各々どのように生活していかなければならないのか、またどのように人と接していかなければならないのか、教えるものであり、社会生活における秩序を保つために礼が存在していた。

武道を一つの枠、もしくは武道という一つの社会として捉えた時、そこにおける礼の概念は、単なる礼という形式ではなく、その精神に、個我を超えた自己を包含していると考えなければならない。武道には、殺傷の目的から生まれた技が存在するからこそ、ルールに従い、相手の存在によりその技が生き、試合や稽古が成立しているのである。そこから生まれる克己等の精神は、人間の相互関係を保ち、それにより武道という一つの社会の秩序を守ることにつながるのである。そして、この秩序は、武道の枠を超えて、社会まで広げることができるといえよう。この精神と行動が、武道教育の概念であり、礼に包含されているのである。

## 10、「礼に始まり礼に終わる」

武道教育では、礼儀が重要な作法の一つであるとされているが<sup>1)</sup>、中林は武道について、「武道をやれば礼儀正しくなり、秩序観念が育成されるというような表面的なものではなくて、生活すべての秩序が道として実現されていくという修正道というところに意義がある」<sup>2)</sup>と指摘している。そして、武道における自と他の関係について以下のように述べている。

「武道の場は、自と他が勝敗（昔ならば生死）をかけて争うものである。いいかえれば自他が共立しえない対立的なものであり、お互い相手を否定しあうところに技が生まれているともいえよう。しかし、人間というものは、個としては独立の存在であるが、自他に共通する人間性によって支えられる存在でもある。自と他の間にある差異は、自と他に相通ずる共通の基盤を持つからに他ならない。共通の基盤を持たないところに自と他の比較も成り立たないはずである。武道修行の到達境は、勝敗をかけた危機的場面において自と他の窮極境を自覚することであろう。相手を恐れず、恨まず、あなどらぬ心境を目指すものといえよう」<sup>4)</sup>。

中林は、自と他の究極境を自覚することにより、相手は自己と対立しつつも、いとおしむべき心を通わせるべき存在であり、人間の文化進歩は、この自覚の境地から出たと述べている。自他が対立しながらも、一体であることを自覚するためには、自己を対象化し、自己を投げ出して活動することが要請されるのである。個我によって対立しているときは、個人と個人が争う醜い闘争となり、これは動物の闘争と変わらないといえよう。しかし、人間は個我を乗り越え、自と他の一体性を感じるにより、世界を知り、自己が確立されるのである。武道では、「身と心、自と他、勝と敗、矛盾するこれらの概念を一元的に捉え、自己に同一化する」<sup>5)</sup>ことが重要である。武道で、古くから礼を重要としているのは、武道という特殊な種目であるからこそその所以なのであろう。武道に礼が存在しなければ、それは暴力と等しいものとなる。

武道の場、武道という空間、武道という社会における「礼に始まり礼に終わる」という概念は、初めと終わりの礼<お辞儀>という形式ではなく、その精神に、自我を超えた自己を包含していなければならない。相手があつての自分なのである。試合で、自分が勝利したとしても、相手を気遣うことができる精神状態でなければならない、また敗北したときも同じである。自分の都合で一喜一憂してはならないのである。そこから生まれる自己抑制の精神や克己・謙譲といった精神は、人間と人間の相互関係を保ち、それにより武道という社会の秩序を守ることにつながる。この精神を守ることが、武道の礼である。礼は精神の体現化であり、その場及びその空間においては、自分が苦痛であっても、逆に歓喜であっても、それを表情に出し、相手を不快にすることはせず、常に平常心を保っていなければならないのである。

武道の「礼に始まり礼に終わる」という概念は、「礼の精神で始まり礼の精神で終わる」ということであり、その場においては、終始、礼を守ることが求められる。ここに武道における礼の教育的要素が包含されているのである。入り口と出口をはっきりさせ、その空間に存在していることの意義を明確にさせるのである。礼の調和原理・区別原理である。

## 11、おわりに

今日、武道の国際化、武道のスポーツ化という状況において、日本武道が進むべき道をどのように考えるか、重要な岐路にさしかかっていると思われる。本研究は、現在の武道における礼の形骸化・虚礼化によって生まれた、「武道には、何故礼が存在するのか、またその礼は、現在の武道において機能しているのか」という疑問を解決すべく、古代中国で成立した礼から現代武道における礼について考察してきた。武道の精神的側面といわれている礼の概念から、武道のあるべき姿、またそこにおける教育的価値について検討してきた。これまで、検討してきた内容をまとめると以下ようになる。

①古代中国で成立した礼は、大きく捉えて社会の秩序であった。礼には、相手を尊重し、思いやりという仁の要素も含んでおり、礼によって人と人との調和をもたらしていた。人々が円滑に過ごしていくための知恵であり、文化でもあった。古代中国における礼の概念は、調和原理、区別原理といった社会の秩序を守るという重要な役割を果たしており、それは国を支えていた人間の精神文化の精髓であった。

②新渡戸は、礼について、社会秩序を保つために人が守るべき生活規範の総称であり、儀式、作法、制度等を含むものであると述べている。礼には、相手に対して敬虔な気持ちで接するという謙譲の要素がある。他人の安楽を気遣う考え深い感情の体現化なのである。相手に対する思いやり、敬譲の精神などを古代中国の礼の概念と共通している点がみられ、礼は日本の社会においても重要な要素であったと考えられる。

③武道の背景には、殺傷の目的によって生まれた武術があり、その武術を封建制度が崩壊した新しい時代に適応する武道に作り上げ、それに教育的要素を加えたのは嘉納治五郎であると述べた。嘉納は、武道を行うことによって、生活を律し、自己を成長させ、社会の調和発達に尽くすべきであるとし、ここに教育としての道があるとした。また武道にはルールが存在し、そこから秩序が生まれ、ルールに従うところに教育的価値があったといえる。これらの精神を守ることが、武道の礼につながっていたのである。武道の「礼に始まり礼に終わる」というのは、礼をするという表面的な行動ではなく、「礼の精神で始まり礼の精神で終わる」ということであり、その場においては、終始、礼を守らなければならない、ここに武道における教育的要素が包含されているのである。

古代中国において成立した礼や武士社会の礼は、社会形成上の意味合いを強く持っていた。現代の武道における礼も、意味合いは多少異なるが、その普遍的な本質は変わらないといえる。武道をやることにより、礼儀正しくなり、信義、礼節、克己などの徳目が培われるなどといった効果があるとされているが、実際は、このような表面的なものではなく、生活のすべての秩序が道として実現されていくという、修正道であるところに武道教育としての礼の意義があるといえる。

今後の武道教育において、勝利至上主義及び礼の形だけの教育ではなく、フェアな精神に伴う行動・態度の持続としての「礼」の本質的教育が必要である。礼の本



質を理解した上で、現代武道における礼の教育的価値を再構築する必要があるだろう。

## 注記及び引用参考文献

### 2、武道における礼の問題点

- 1) 国士舘大学武道研究所著：「武道と礼—武道は礼に始まり礼に終わるの考察—」、  
「武道学研究」、10 卷 2 号、日本武道学会、1977 年
- 2) 新村出編：「広辞苑 第四版」、1991 年 11 月
- 3) 田中守・藤堂良明・東憲一・村田直樹著：『武道を知る』、不昧堂、2000 年、  
pp.103-104
- 4) 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳：『武士道』、岩波書店、1938 年、p.58
- 5) 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳：『武士道』、岩波書店、1938 年、p.54

### 3、古代中国における礼の起源とその概念

- 1) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、p.9
- 2) 古川哲史編：『倫理思想史』、有信堂、1963 年、p.171
- 3) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、p.100

### 4、『礼記』における礼

- 1) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、p.16
- 2) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、p.20
- 3) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年。
- 4) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、p.46
- 5) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、p.47
- 6) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、p.49-50
- 7) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、pp.51-52
- 8) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、p.52
- 9) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973 年、p.69

- 10) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973年、p.50
- 11) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973年、p.53
- 12) 服部宇之吉著：『禮の思想 附實際』、岩波書店、1935年、p.12
- 13) 小野機太郎著：『論語』、新光社、1922年、p.334-335
- 14) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973年、pp.52-53
- 15) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973年、pp.52-53
- 16) 「仁といえは主として情的の面から見た徳である。従つて、仁の本質は親愛の情であるといひ得る。而してこの親愛の情は社会結合人類和樂の基本となるものである」武内義雄著：『中国思想史』、岩波書店、1936年、p.16
- 17) 「仁といふ徳は最善の徳であるけれども、決して遠く離れた處にあるものではない。もと人が心の中に持つて居る徳であるから、得ようとすれば誰にも得られるものである」小野機太郎著：『論語』、新光社、1922年、p.121
- 18) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973年、p.10
- 19) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973年、p.10
- 20) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973年、p.10
- 21) 竹内照夫著：『新釈漢文大系 第27巻 礼記』、明治書院、1971年、p.837
- 22) 小野機太郎著：『論語』、新光社、1922年、p.57

## 5、新渡戸稲造の『武士道』における武士の教育と礼の概念

- 1) 尾渡達雄著：『倫理学と道德教育』、以文社、1989年、p.99
- 2) 尾渡達雄著：『倫理学と道德教育』、以文社、1989年、p.99
- 3) 尾渡達雄著：『倫理学と道德教育』、以文社、1989年、p.99
- 4) 「盛岡で生まれる。札幌農学校で学んだ後、アメリカで学んだ後、アメリカ、ドイツで農政学を研究。帰国後は札幌農学校教授、京都帝国大教授第一高等学校校長、東京帝大教授、東京女子大学長を務め、青年の教育に力を注いだ」新渡戸稲造著、奈良本辰也訳：『武士道』、三笠書房、1997年
- 5) 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳：『武士道』、岩波書店、1938年
- 6) 新渡戸稲造著、奈良本辰也訳：『武士道』、三笠書房、1997年
- 7) 新渡戸稲造著：『武士道』、講談社インターナショナル、2002年

- 8) 笠谷和比古著：『武士道その名誉の掟』、教育出版、2001年、p.174
- 9) 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳：『武士道』、岩波書店、1938年、p.174
- 10) 新渡戸稲造著、奈良本辰也訳：『武士道』、三笠書房、1997年、p.15
- 11) 高橋富雄：「武士道と日本道徳」、「体育科教育」、大修館書店、1984年
- 12) 高橋富雄：「武士道と日本道徳」、「体育科教育」、大修館書店、1984年
- 13) 新渡戸稲造著：『武士道』、講談社インターナショナル、2002年
- 14) 高橋富雄：「武士道と日本道徳」、「体育科教育」、大修館書店、1984年
- 15) 高橋富雄：「武士道と日本道徳」、「体育科教育」、大修館書店、1984年
- 16) 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳：『武士道』、岩波書店、1938年、p.27
- 17) 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳：『武士道』、岩波書店、1938年、p.27
- 18) 木下秀明：「武道と競争スポーツの100年考」、「体育の科学」、40巻2号、1990年
- 19) 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳：『武士道』、岩波書店、1938年、p.174
- 20) 新渡戸稲造著、奈良本辰也訳：『武士道』、三笠書房、1997年、p.15
- 21) 杉山重利編：『武道論十五講』、不昧堂出版、2002年、p.28
- 22) 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳：『武士道』、岩波書店、1938年、pp.58-64
- 23) 新渡戸稲造著、奈良本辰也訳：『武士道』、三笠書房、1997年、pp.55-64

## 6、礼の二面性

- 1) 村上隆夫著：『メルロ＝ポンティ ■人と思想 112』、清水書院、1992年、p.81
- 2) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、p.153
- 3) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、p.154
- 4) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、pp.154-155

## 7、武士道から武道へ

- 1) 今村義雄他著：『日本武道大系 第10巻 武道の歴史』、同朋社出版、1982年、p.330
- 2) 今村義雄他著：『日本武道大系 第10巻 武道の歴史』、同朋社出版、1982年、pp.330-331
- 3) 森川貞夫：「武道研究の今日的視点」 「体育科教育」、大修館書店、1984年

- 4) 今村義雄他著：『日本武道大系 第10巻 武道の歴史』、同朋社出版、1982年、p.331
- 5) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、p.95
- 6) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、pp.95-96
- 7) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.130
- 8) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.130
- 9) 杉山重利編：『武道論十五講』、不昧堂出版、2002年、p.29
- 10) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.131
- 11) スペンサー（1820年イギリス）が、教育論として、知育、徳育、体育を唱えた。三笠乙彦訳、梅根悟・勝田守一監修：『知育・徳育・体育』、明治図書出版、1962年、pp.237 - 252
- 12) 杉山重利編：『武道論十五講』、不昧堂出版、2002年、p.31
- 14) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.131
- 15) 西久保弘道「武道講話」『警察協會雑誌 第七十六號』、警察協會本部、1915年
- 16) 木下秀明：「文武両道思想の系譜」『体育科教育』、大修館書店、1984年
- 17) 田中守・藤堂良明・東憲一・村田直樹著：『武道を知る』、不昧堂、2000年、pp.103-104
- 18) 体育原理研究会編：『体育教師像・武道の現代化』、不昧堂書店、1966年、pp.130-131
- 19) 二木謙一・入江康平・加藤寛編者：『日本史小百科<武道>』、平成6年、p.10

## 8、武道の特性

- 1) 二木謙一・入江康平・加藤寛編者：『日本史小百科<武道>』、平成6年、p.10
- 2) 二木謙一・入江康平・加藤寛編者：『日本史小百科<武道>』、平成6年、p.10
- 3) 渡辺融：「武道の文化史」、『体育科教育』、大修館書店、1987年
- 4) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.3
- 5) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.3
- 6) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.3

- 7) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.136

## 9、武道教育の概念と現状

- 1) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、p.152
- 2) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.3
- 3) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.3
- 4) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.3
- 5) 今村義雄他著：『日本武道大系 第10巻 武道の歴史』、同朋社出版、1982年、p.338
- 6) 今村義雄他著：『日本武道大系 第10巻 武道の歴史』、同朋社出版、1982年、p.238
- 7) 杉山重利編：『武道論十五講』、不昧堂出版、2002年、p.32
- 8) 今村義雄他著：『日本武道大系 第10巻 武道の歴史』、同朋社出版、1982年、p.239
- 9) 今村義雄他著：『日本武道大系 第10巻 武道の歴史』、同朋社出版、1982年、p.239
- 10) 杉山重利編：『武道論十五講』、不昧堂出版、2002年、p.32
- 11) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.136
- 12) 富木謙治著：『武道論』、大修館書店、1991年、p.13
- 13) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、p.221
- 14) 田島行夫：「剣道の指導と人間形成」「武道学研究」、日本武道学会、1988年

## 10、礼に始まり礼に終わる

- 1) 大道等、頼住一昭編：『近代武道の系譜』、杏林書院、2003年、p.149
- 3) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、p.143
- 4) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、pp.156-157
- 5) 中林信二著：『武士道のすすめ』、島津書房、1994年、p.161